

第三章

『今を感じる、行動する』

～停滞した現状を変えたい、何かを始めたいと感じているあなたへ～



「感じる」とは即ち「動くこと」である。

人は「頭で考えて動く」のではなく、「感じて動く」ものである。

行動なくして、生きている証なし。

つまり、人間の本質は感性（感じる力）であり、感性が鈍るとは、生きる力を失うことである。

今こそ、感性を呼び覚ませ。

これは、私の恩師である行徳哲夫先生の教えです。胸の奥深くにグサッと刺さるものがありました。

「感即動」とは、『論語』から出た「感動」という言葉の語源だそうです。

人は感じるから動く、理屈（理性）では動かないことを意味しています。

私は、教育・コンサルティング業界に入って10年になりますが、これまで1万人以上の方と関わりを持たせていただきました。

その中で、気づきを得て一步を踏み出せる人とそうでない人がいらっしやいます。

その違いの根っこにあるのが、この「感動」の有無にある...つまり、行動を起こせた人の共通する点は「感性」で深く気付いているのだ...ということに、改めて気付かされました。

私たちはとかく頭で考え、理解できること（＝論理）に囚われがちです。

小さいころからそのような教育を受けてきましたし、ビジネスの世界では論理的思考力が求められる場面が殆どです。しかし、どうでしょうか。

このように論理的に物事を考え、導き出した答えに対して、

「よし！やってやろう！」「ワクワクしてきた！早く始めよう！」

という想いが湧いてきますでしょうか？

どちらかと言えば、「～しなければならぬ。頑張ろう」的などこか無理をして自分を突き動かすような感覚ではないかと思えます。

頭で考えるてばかりで、自分の心の声は無視して結論を出し、行動する。

この行動はある意味、「無理をした行動」なので、ストレスがたまり、結局続かず諦める。諦めずに続けられたとしても、無理はし続けるから、心の余裕がなくなり、自分だけでなく、周囲の人たちも傷つけていく...。いずれにしても「成果」が出ない、若しくは続かないので、自信を失い、余計に悩み、考えてしまう...

このような「負のスパイラル」に入ってしまった人が結構多くいるのではないのでしょうか？

今、皆さんはどんな気持ちで毎日を過ごしていますか？

最近、いつ心から笑いましたか？ 泣きましたか？

最近、感動したことがありましたか？

私はより良い社会、将来を創っていくカギは、この「感性」を呼び覚ますことにありと確信しています。（特に閉塞感のある今の日本には絶対に必要！！）

是非皆さんも「自分の心の声（感性）」に耳を傾けてみてください。

本当に自分がワクワクすること、したいこと、自分にとって大切なことに意識を向け、時間を使うことこそ、人生を充実したものとし、結果として大きな成果を獲得することができるのです。

「もし今日が自分の人生最後の日だとしたら、
今日やる予定のことを私は本当にやりたいだろうか？」
それに対する答えが“NO”の日が幾日も続いているのなら、
何かを変える必要があるということだ。

—スティーブ・ジョブズ（アメリカ・経営コンサルタント、Apple創業者）

＜自己を受容・承認し、強みを伸ばす5つの簡単アクション＞

1. 毎日寝る前に、2分間、今日のプラス面を振り返る
2. 信頼し合っている人とのまとまった時間を週に1回は持つ
3. 嬉しかったこと、達成感を感じた出来事を書き留める(可視化する)
4. 周囲から感謝される行動、仕事をする時間を意図的に増やす
(スケジュール化する)
5. 一日一感謝、一承認する習慣を持つ

皆さんは、日々、何かしらの「変化」を感じていますか？
何かしらの「変化」に直面した時、どのような気持ちになるでしょう？
ワクワクでしょうか、それとも不安な気持ちになるのでしょうか？

『日々是新（ひびこれあらた）』とは、経営の神様とも呼ばれる松下電器産業（現パナソニック）創業者である松下幸之助さんの数ある名言の一つです。
私は、この言葉に大変勇気づけられてきました。

昨日は昨日、今日は今日。昨日の苦勞を今日まで持ち越すことはない。

「一日の苦勞は一日にて足れり」というように、今日はまた今日の運命が開ける。

昨日までの分まで背負ってはいられない。毎日が新しく、毎日が門出である。

『日々是新』なれば、すなわち日々是好日。素直で謙虚で、しかも創意に富む人は、毎日が明るく、毎日が元気。さあ、みんな元気で、新しい日々を迎えよう。

—松下幸之助 「道をひらく」より

私たちはとかく、これまでの経験（過去の成功体験）に執着してしまいがちではないでしょうか。

過去の成功体験を「活かす」のは良いとして、これが「執着」となるところに大きな落とし穴がある...

ということは、皆様も十分にご理解いただいているところでしょう。

—過去の成功体験への執着が、日々変わる社会（事業）環境への順応を妨げる

—過去の失敗への執着が、自信を失わせ、行動そのものを妨げる

—過去、相手に感じた印象が「思い込みの色眼鏡」となり、今の相手の真の姿を隠してしまう

これらは、脳の奥底で「変化する」ことに対する「恐れ」や「間違った認知」が原因で、防衛本能的に反応してしまっている結果と考えられています。従って、よほど自ら「変化する」について日々意識し、行動し続けなければ、この「執着の罠」にはまってしまいう可能性は高いということでしょう。

そもそも、「変化」とはどのように捉えるべきなのでしょうか。

私は、松下幸之助さんのおっしゃる通り、「あらた」とは「おめでたい、素晴らしいこと」だと捉えてはどうかと考えています。水も留まっていると腐ってしまうように、変化すること、フローの状態こそ自然な状態であり、より良き未来に向かっていく証拠なのではないでしょうか。

皆さんも過去を振り返って、10年前と全く同じ状態でしょうか。成長したと感じた体験の中に「自身の考え方、行動の変化」はなかったでしょうか。きっと何らかの「変化」があったはずです。もし、「変化が自然で当たり前のことである」であるなら、変化を待つのではなく、むしろ積極的に変化を自ら起こしていくことこそ、より良い方向に向かうために必要なのでしょうか。

“世界に変化を望むなら、あなた自身がその変化となれ”

— マハトマ・ガンジー（インド・弁護士、宗教家、政治指導者）

“変化をコントロールする最善の方法は、自ら変化を創り出すことである”

— P.F.ドラッカー（オーストリア 経営学者・コンサルタント）

“失敗することを恐れるより、生活にくふうがないことを恐れた方がいい”

— 松下幸之助（日本・実業家、現Panasonic創業者）

どんな小さなことでも構わないから、自分自身で「主体的な変化」を起こしていこう。

毎日、どんな「変化」があったかを振り返る習慣を持とう。

昨日までが自分にとって不本意な日々だったとしても、『日々是新』の心もちで、勇気を出し、あたらしい一步を踏み出してみよう。

心配しなくても大丈夫。誰にでもその一步を踏み出す力は備わっているのだから。

「変化」こそ「成長」...、これまで成長してきた自分が証明している。それが自然なことなのだ。

さあ、一緒に、ワクワクしながら「新たな自分」に、自分の足で会いにいきましょう！

＜自分に“より良き変化”をもたらす6つのシンプルアクション＞

1. 変化に向けた「最初の一步」は、シンプルで簡単で実践イメージが持てるものを設定する
2. 変化に向けたアクションを起こせたら、自分を声に出して褒める、周囲に褒めてもらう
3. 新しいことにチャレンジしている人との接点を多くする、話を聴く
4. アクションを貼り出す、周囲に宣言するなど、自分が行動を起こしやすい環境をつくる
5. 計画を立てる時は、これまでと違う施策、アクションを必ず入れることをルールにする
(過去の延長線上の目標・計画の場合はNGとする)
6. 毎日、寝る前に「変化」がいくつあったかカウントする

この年、「東日本大震災」が起きました。様々な思いがある中で、今、具体的に私たちにできることは何でしょうか？

この暗雲を突き抜け、希望の光を感じるには、今、何が最も重要なのでしょうか？

それは、一人ひとりが、

『元気に、率先躬行（そっせんきゅうこう）で生きる』

ことにつぎるのではと考えます。

「率先躬行」とは、人より先に自分からすすんで実行し、導いていくという意味です。

似た言葉で、「率先垂範」がありますが、こちらは態度や行動に焦点を当てているのに対し、「率先躬行」は、態度、行動を含む生き様そのものに焦点を当てる、より高次の言葉だそうです。

私たちは今回の大震災を通じて、

- ・人知など自然の前では砂上の楼閣であり、人は生かされている存在である真実
- ・経済大国、技術立国というイメージは、名実共に過去のものとなりつつあるという

真実

・当たり前と思っている便利な暮らしは、一瞬で大混乱へと変貌するという真実を目の当たりにしました。そして、「これまでと変わらぬ暮らし」を取り戻すのではなく、「新たな日本の形＝新生日本」を本気で再構築しなければならないことに気づかれました。

また、このような「マイナスの真実」の一方で、大災害にも関わらず整然と行動できる日本人の素晴らしい気質や、国内外からの暖かい祈りと具体的な支援、「あなたは一人ではない、一緒にがんばろう」という強い思いといった「プラスの真実」にも出会うことができました。

震災で亡くなられた方々のためにも、これらの真実を心に刻み、「ただの悲しい大惨事」とせずに、何としても「新生日本」を創っていくこと、それが、命ある私たちの使命であると考えます。その第一歩として、最も重要なことが、一人ひとりが「元気に、率先躬行で生きる」こと

つまり…、

こういう時だからこそ、まず自分が元気になって、周囲を勇気づける

誰かがやってくれる、変えてくれるという「受身の姿勢」を捨てる

自己を肯定し、他者に共感できる「感性」を磨く

毎日一つでも、仕事や暮らしをより良くするための具体的な改善行動を起こす

..という考え方、行動に本気でチャレンジする、変わっていくことだと強く思うのです。

歴史を振り返れば、日本にも数多くの大転換期がありました。その度に、私たちの祖先は考え方、行動、生活様式を変化させようと努力し、苦難を乗り越え、今の社会を築いてきました。

今回も、正に「大転換期」です。今度は、私たちが未来を創っていく番です。

そして、今回は、一握りの偉大なリーダーの力によるものではなく、一人ひとりの心と知恵と行動が結集しなければ、乗り越えられない「転換」であると思うのです。

「あの震災があったからこそ、皆が心を1つにして多くの新しいものを生み出すことができ、こんなにいい国ができたんだね」と言える未来を、一緒に創っていきましょう！！

“私にできることは小さなこと。

でも、それを感謝してできたら、きっと大きなことだ。”

__星野 富弘

“今自分にできること。頑張ればできそうなこと。

そういうことを積み重ねていかないと、遠くの目標は近づいてこない。”

— イチロー（日本・元野球選手、メジャーリーガー）

＜ “元気に、率先躬行で生きる” ための5つのシンプルアクション＞

1. 健康に良い行動を1日1アクション実行する習慣を持つ
2. 自分が元気になるモノ、空間、人と触れ合う時間を1日1回かならず取る
3. 1日の終わりに、良かったこと、改善した方が良かったと感じたことをそれぞれ1つ書いてみる
4. 会話は、先ず相手の「気持ちや考え」を理解することからはじめる
5. 友人とありたい将来について、語り合う「場」を月に1回は設ける

「知って行なわざるは、未だこれ知らざるなり」

「知」とは「知ること」即ち知識を得ること、学ぶことを意味し、「行（こう）」とは「行なうこと」即ち行動することを意味する。「知は行の始め、行は知の成るなり。知行は分かちて両事と作（な）すべからず」、分かり易く言えば、「いくら知識があっても、その知識が行動に伴わなければ何の意味もなさない」ということである。

この言葉はご存知の方、ご自身の信条にされておられる方も多いのではないのでしょうか。

この『知行合一』は、中国の哲学である「陽明学」の命題の一つです。「陽明学」は、大塩平八郎、佐久間象山、河井継之助、吉田松陰、西郷隆盛、高杉晋作、山形有朋、安岡正篤など、日本の歴史上の英傑たちも大きな影響を受けたとされています。

私もこの言葉には感銘を受け、常に念頭にあり、自分に問いかけ続けています。

「知行合一。本当の意味で、自分は知ることができているか？」

「知る」とは「行動」を伴うこと。つまりは、自分は知ったことを、実践できているのかと…。

教育、コンサルティングを仕事としている私にとって、この『知行合一』は本質的かつ永遠のテーマです。

例えば研修の最後に、「本日の内容は理解できましたでしょうか？」と問いかけると、多くの受講生が「概ね理解できた」と答えます。しかし後日、「研修で理解したことについて、具体的な行動を起こしましたか？」と問いかけると、「意識はしているが、具体的な行動はしていない」「そもそも内容を忘れていた」といった答えが圧倒的に多くなります。

「知って、気づいたこと」を行動につなげていくことは非常に難しいのです。

『知行合一』の状態は、どうすれば創ることができるのでしょうか？

『知行合一』できている人はどのようなことを心がけているのでしょうか？

これまで経験の中で、次のようなことが共通事項ではないかと感じています。

- ・ 対象となる知識・見識に対して深い気づきがある（＝共感し、共鳴する）
- ・ 真剣に考え続けている（想い続けている）何か…目標や志、悩みをもっている
- ・ 知識・見識を学ぶ際に、実際の行動を同時にイメージしている
- ・ 自分を行動へとかきたてる「環境」を自らつくっている
- ・ 行動力のある人に関わる機会を多くもっている

皆さんはいかがでしょう？『知行合一』できていますでしょうか？
新たな知識・見識に触れ、気づき、実際に動いて、感じて、その結果をしっかりと振り返る…。このシンプルなプロセスこそ、最も効果的で本質的な「学びのプロセス」なのでしょう。

昔から、「見たり、聞いたり、試したり」という言葉がある。
私はこの中で最後の「試したり」が一番大切だと思っている。
「為すことによって学ぶ」
という実践的勉強法が、一番力になり、身についた。

— 本田宗一郎（本田技研工業 創業者）

知識をつけることは、行動することの始まりであり、行動することは、
つけた知識を完成させることである。
行なわなければ、知っているとは言えない。
知っていても行なわないのは、まだ知らないのと同じである。
知って行なってこそ本当の知恵、真知である。

— 吉田松陰（幕末の長州藩士、思想家、教育者）

『知行合一』の状態となることを一人ひとりが意識していくことは、復興への道のりも、蔓延する社会不安も、停滞する経済も、様々な課題を解決する糸口となる、私はそう確信しています。

＜吉田松陰流 「行動」と「成果」を導く5つのポイント＞

1. 短所は意識せず、長所を伸ばし、自信を持つ
2. （自分も、周囲の人たちも）褒めて、認めて、喜ばせる。
そして、好きになる
3. 周囲からの期待を踏まえ、「今、ここ」に集中する
4. いいと思うことはすぐにやり、悪いと思うことはすぐにやめる
5. 物事のプラスの側面に意識を向ける

—当時は分からなかったが、A p p l e社に解雇されたことは、私の人生で起こった最良の出来事だったと後に分かった。成功者であることの重さが、再び創始者になることの身軽さに置き換わったのだ。何事につけても不確かさは増したが、私は解放され、人生の中で最も創造的な時期を迎えた。

—あなたの時間は限られている。だから他人の人生を生きたりして無駄に過ごしてはいけない。ドグマ（教義、常識、既存の理論）にとらわれるな。

それは他人の考えた結果で生きていることなのだから。

他人の意見が雑音のように、あなたの「内面の声」をかき消さないようにしなさい。そして、最も重要なのは、自分の「心と直感」を信じる勇気を持つことです。

それはどういう訳か、あなたが本当になりたいものを既によく知っているのだから。それ以外のことは、全部二の次の意味しかないのだ。

—Keep Looking, Don't Settle.

—Stay Hungry, Stay Foolish

2011年10月5日早朝、世界に革命的イノベーションをもたらした偉大なリーダー、スティーブ・ジョブズ氏が56歳という若さで旅立たれました。上記は、同氏が2005年にスタンフォード大学の卒業式でスピーチした一節です。有名なスピーチ（以前に私からも配信させていただきました）ですし、ここ数日は多くのメディアで取り上げられているので、ご存知の方も多いのではないでしょうか。

スティーブ・ジョブズ氏は、私にとっても非常に大きな影響をもたらしてくれた方でした。生み出した製品の美しさや細部へのこだわりはもちろん感動を覚えるのですが（私もiphoneユーザーです）、一番心を揺さぶられたのは、やはり同氏の物事の捉え方・感じ方、そして生き方そのものでした。

私がスティーブ・ジョブズ氏のことを知った（聞いたことがあるレベルでなく）のは、そんなに昔のことではありません。現在の教育、コンサルティング事業に携わるようになって暫くですから、8年前ほどでしょうか。同氏がA p p l e社に復帰して、立て直して成功し、取り立たされていたころです。

大学を中退、ガレージからA p p l e社を起業して世界初のパーソナルコンピュータを創り出し、成功するも自分の起こした会社から追放され、それでもまたP i x a r社など新しい会社を起業し続け、その後、なんと身売り寸前の苦境に立ってしまっていたA p p l e社に復帰して再生を実現させる....。

その劇的な人生を知れば知るほど、何故、こう何度も立ち上げられるのか、新たなものを創発できるのか、走り続けるバイタリティーの源泉は何処にあるのか...とにかく大きな衝撃を受けたのを憶えています。そして、2005年のスタンフォード大学のスピーチと出逢い、その「真意」を知った時、私は自分の生き方や価値観を大きく変える—正確に言えば、確信を得る—こととなりました。

同氏の死は、世界全体に大きな「哀しみ」をもたらしましたが、彼が残した数多くのメッセージ、商品、可能性はこれからも私たちの心や行動の中に生き続け、また新たな「価値」を生み出し、より良き未来を創っていくことと思います。私も、彼から受けた影響を仕事の中や日々の生活の中で活かし続けていこうと考えています。

『感奮興起（かんぷんこうき）』

心に強く感じて奮い立ち、勢いが盛んになること。

「感奮」は心に強く感じて奮い立つことを意味し、

「興起」は勢いが盛んになることを意味する。

“常に何かを感じ、情性に流されることなく、奮い立って行動する”

という意味であり、「創発」と「成長」に欠かせない資質である。

みなさんは今、情熱を傾けている「何か」がありますか？

最近、新しい「何か」にチャレンジしたり、生み出したりしたのでしょうか？現状に感謝しつつも満足はせず、常により良い状態に向けて行動を起こしているのでしょうか？

スティーブ・ジョブズ氏の言葉がこの言葉とシンクロします。

—Keep Looking, Don't Settle. Stay Hungry, Stay Foolish !—

本当に自分が情熱を傾けられる「何か」を探し続けよう、ワクワクする「未来」を探し続けよう、自分の新たな可能性を探し続けよう、「こんなもんだろ」と安易に妥協せず、そして諦めずに。

常に食欲であれ、常に突き進む勇気を持て！ 周りから「無茶だな」「馬鹿か」と思われるぐらいで丁度いい。常識にとらわれず、自分の感じるままに思いっきり行動し続けよう！なんとなく先が見えず、閉塞感が漂う状況ですが、だからこそ自分の心を感じ、奮い立たせ、力強く前に進んでいこうではありませんか。素晴らしい「今」と「未来」を創るために。

<モチベーションを維持する5つのポイント>

1. 「したいこと」「好きなこと」を1日に少しでも実行する
2. 自分にプラスのフィードバックをしてくれる人と接する時間を増やす
3. モチベーションの高い人と接する時間を増やす
4. 問題点や過去ではなく、強みや未来にフォーカスする
5. 「感謝」する習慣を持つ（一日一感謝、一日一承認）

—「勇」とは、勇んで行動すること。

「猛」とは、知恵の限りを尽くすこと。

「精」とは、不純な雑じり気のないこと。

「進」とは、間断なき前進また前進のこと。

自らの信じる道を、困難があったとしても勇気を持って一步を踏み出し、真っ直ぐに、一所懸命歩み続けることで、己の生命と大宇宙とが一体となり、本当の目的・目標を達成することができるのだ。

ここ数年を振り返ると、「迷いと憂い、不安と不信」が特に目立った時期であったと感じます。

社会全体が、高度成長期～経済大国日本確立の余韻を引きずったまま、変革が行われないうまま過ぎた20年。そのような中で起きた、相次ぐ大地震や大洪水、ユーロ圏経済不安を引き金にした世界経済の失速と相対的な超円高…。やはり私たちは、今こそより良い未来に向けて、変革の一步を踏み出すことが必須なのでしょう。

最近、研修で20～30歳代の「リーダーシップ強化」や「キャリア開発」をテーマにすることが多いのですが、全体的に「無難に、守る」という姿勢の方が多い印象を持ちます。現社会環境の影響で先行きの不透明さや不安が増大し、「無難に、守る」姿勢を継続する選択となっているのですが、それこそ大変危険な選択をしている・・・と感じてしまいます。

生き残るためには、環境適応が必須です。環境が激変するならば、自らも変化してその環境に対応する必要があります。しかし、「無難に、守る」姿勢は、結局「現状維持」「新たなチャレンジは避ける」という「環境適応」とは逆の選択であり、本当の意味で自己の未来を築く方向に向かっていないと言えるでしょう。

昨年ドラマにもなった「第一次南極越冬隊」を率いた副隊長の西堀栄三郎さんは次のような言葉を残しています。

「とにかくやってみなはれ！ やる前から諦める奴は、一番つまらん人間だ」

「人にとって最も恐ろしいのは、惰性で日々を送ることである。

向上心があれば、飽きることがない。仕事・生活の中に、向上の道を残さねばならない。向上を求めねばならない」

「探検家は、調査をしてから、やるかやらないかを決めるという方法はとりません。やると決心して調査をはじめます。やる決心をしての調査は、いかに失敗のリスクを減らすかに専心します」

今、日本は、世界は、大きな変革期に差し掛かっていると強く感じます。そしてそれは、決して悲観的なものではなく、より良い未来に向かっていく「前向で積極的な変革」だと感じます。

皆さんは、今年どんな「変化」を自分に起こしますか？

どんなことにチャレンジしていきますか？

勇気ある一歩を踏み出す為に、何を意思決定しますか？

『勇猛精進』の心持で、果敢に挑戦していきましょう。不安や恐怖という思い込みの殻を破り、新しい時代を自分たちで創っていく気概を持って。その力を誰もが持っているのですから。

＜ドラッカー流イノベーションを成功させる 5つのポイント＞

1. 右脳と左脳の双方を使え

イノベーションを成功するものは右脳と左脳の両方を使う。いかなるイノベーションが必要かを分析を持って知る。数字を見る。それと共に人を見る。彼らの期待、価値、ニーズを知覚を持って知る

2. 計画的に「捨てる」ことこそ第一歩

イノベーションを行う組織（人）は、昨日を守るために時間を使わない。昨日を捨ててこそ、資源を新しいもののために解放できる

3. 「すでに起こった未来」に気づき、自分が変化する

あらゆる出来事は、発生とインパクトにタイムラグがある。その既に起きている変化に気づき、明日何をすべきかではなく、明日を創るために今日何をするかを決めることが重要である

4. 予期せぬ成功を見逃さない

予期せぬ成功を認めることは容易ではない。勇気がいる。加えて現実を直視する姿勢と、間違っていたことを率直に認めるだけの謙虚さがいる

5. 世の中の人々の認識変化に敏感になれ

「コップに水が半分はいつている」と「コップが半分空である」は量的には同じでも意味合いは全く違う。取るべき行動も違う。世の中の認識が、「半分入っている」から「半分空である」に変化する時、イノベーションの機会が生まれる。そしてそれは必ず認知できる

「計画された偶発性」理論(Planned Happenstance Theory)とは、スタンフォード大学のジョン・D・クランボルツ教授が提案したキャリア論に関する考え方。

個人のキャリア形成においては、実にその8割が予期しない出来事や偶然の出会いによって決定される。重要なのは、その偶然を避けるのではなく、当人の主体性と努力によって最大限に活用すること。

さらに、「予期せぬ出来事」をただ待つだけでなく、自ら創り出せるように積極的に行動したり、周囲の出来事に神経を研ぎ澄ませたりして、偶然を意図的・計画的にキャリア開発の機会としていくことが大切である。

「キャリア開発」をテーマにした研修を担当するようになって、既に10数年が経過しました。

今現在も毎年10数回は、このテーマを中心とした研修をするのですが、ますます、この「計画された偶発性」の重要性を実感することが多くなっています。

私が本テーマの研修を開発した当初は、自己分析(強みと弱み)を認識し、自分自身のありたい姿を描き、自分の所属する会社や組織の期待事項も踏まえた上でキャリア目標を設定、最後にアクションプランを立てる...という内容で、そのベースメッセージは、キャリアとは目標と計画を立て、その通りに実践することで形成していくものだ、というものでした。

今現在でも、上記の研修内容や流れは意味あるものと感じていますが、「目標を立て、計画すればキャリアが形成されていく」という考え方は、ベースメッセージとしては不適當だと考えています。

理由は単純で、不確実で変化が激しく、また選択肢も多様性が増す環境の中で、ある一時点で決めた目標や計画に拘り、その通りに進めていくことそのものが極めて困難であるからです。

クランボルツ教授が提唱するように、「偶発的な出来事」によってキャリアが形成される方が多いのが実態でしょう。それでは、キャリア目標や計画を立てることの意味がないのか...と言えば、そうではなく、むしろ「自分のキャリア形成にとって有用な偶然」を発生させるためにも、目標や計画を立て、まずはそれに沿って行動してみることが、極めて重要であると考えています。

その主体的な行動が、様々な気づき・出会い・新しい自身の能力開発を促すことにつながり、結果として更に満足度（充実度）の高い、洗練されたキャリア形成への道が見えてくると確信しています。「強い興味・関心(探究心)を持ち続け、失敗を恐れずに積極果敢に挑戦していく、まずやってみる。自分の考えに囚われ過ぎることなく、柔軟な視点で選択、意思決定していく」

この思考と行動こそ、現代のキャリア形成を確実に成すための必須アプローチだと感じています。

『素直な心、熱意、努力といった言葉は、
あまりに素朴なために、誰も気に留めない。
しかし、そういう単純な原理こそが人生を決めていくポイントなのだ。』

—稲盛和夫（日本の実業家、京セラ・KDDIの創業者）

『一見たいしたことのない仕事でも、思い切って全力を注ぐことだ。
仕事を一つ征服するごとに実力が増していく。
小さい仕事を立派に果たせるようになれば、
大きい仕事の方はひとりでに片がつく。』

—デール・カーネギー（アメリカ・作家、自己啓発トレーナー）

「計画された偶発性」—将来を見据えつつ、「今、ここ」を大切に取り組むことで、素晴らしい偶然が必ずやってくるはず。そう信じて、毎日を懸命に生きたいものですね。
皆さんは、日々に流されず、新たな何かにチャレンジしていますか？
自分のありたい姿に向かう、「チャンス(=良い偶然)」に気づけていますか？

＜“有用な偶発性”を誘発するためのスタートアクション＞

1. 興味や関心が湧くものを常に見つけ、見つかったら、まず自ら体験(体感)してみる
2. 決めたことは、諦めずにやり続ける。従って、決めることは、やり続けるイメージが持てる「小さな良いこと」を設定する
3. 振り返りを定期的に行い、より良い考え方、やり方があったら柔軟に変えていく
4. 自分と違う価値観や経験を持っている人と定期的に出て話をし、話を共有する
5. リスクや挑戦度合の高いテーマに、常に一つ以上取り組んでいる状態をつくる

「史記」太史公自序「失之豪釐、差以千里」より。

「毫」は、うさぎの毛。細い毛。「釐」は、毫が十本あつまったもの。

「毫釐」は、ごく少ない分量の意。

初めはごくわずかな差が、ついには途方もなく大きな差異を生じるという意味。

私たちは目先の大きなモノ・コト・行動・成果・差異にはすぐに関心を抱き、それらに一喜一憂する。逆に、小さなそれには気づきにくい。

今現在は、小さな行動・成果・差異であったとしても、それが継続されると、長い年月を経てとてつもなく大きなものとなる。

「塵も積もれば山となる」—考えてみれば当たり前の理屈だ。

ならばその本質は、些細と感じられるような事こそ意識を向けて大切にすること。

「ありがたい姿」の実現に向け、効率的に大きな成果を得ることに意識を向けるのではなく、むしろ小さな一歩から始めて、「継続行動」を重視すること。

今一度、自分の仕事や日常生活における「毫釐」を見つめ直してみてもうだろう。

先日、ある会社で30歳前半～中盤の方々へキャリア開発研修を実施してきました。今回の受講生には数年前も研修を担当させていただいており、久しぶりの再会だったのですが、その中で、一際イキイキと輝いて見える男性に目が留まりました。彼は、数年前の年次研修でも積極的に私に話しかけてきた方だったので、私もよく憶えていました。今回も研修中やその後の懇親会で個別に話をする機会があったのですが、彼は現在、インドネシア赴任経験を経てリーダーに昇格、技術職として新しい技術開発プロジェクトを任せられ、忙しくもやりがいを感じて毎日を過ごしているとのことでした。その明るくエネルギーッシュな表情にとっても嬉しくなると同時に、前回は確かに素直で前向きな印象はあったものの、今回ほど目立ってはおらず、能力や行動レベルは他のメンバーとさほど変わらなかったのに...と不思議にも感じました。

その想いをストレートに伝え、なぜ今はそこまで充実し、輝くようになったのかを彼に聞いてみると、

「特別に何かあった訳ではないですけど、しいて言えば人からの頼まれごとや与えられたチャンスには可能な限りNoではなくYesでいこう...を意識して行動してきたことは大きかったと思います」

との言葉が返ってきました。

受講生の中には、残念ながら前回とさほど状況が変わっていない人、むしろ悪化してしまっている人も数名いらっしゃいました。数年前までは五十歩百歩であったのに、この時点での状況ではありますが、見ている「景色」は大きく違ってしています。そして、その違いを生んだのは、持っている能力やスキルでも、想像を絶する努力やトレーニングでもなく、「小さな心がけや行動の積み重ね」にこそあったのだ...と強く感じるのです。

『どんな大きな流れも、きっかけは一人の小さな行動から生まれます。もし、あなたが「自分には大したことなど出来ない」と思ってしまったら、それは、世界にとって大きな損失となるのです。』

— ダライ・ラマ14世（チベット仏教 最高位指導者）

「毫釐千里の心がけ」—

仕事においても、私生活においても、大きな充実感や達成感を得るための秘訣。

効率を追い求めた先にある目先の大きな利益は、「脆さ」をも伴っているかもしれない。小さな一歩で、「すぐには成果が見えないが、重要な行動」こそ大切にしていこう。それは一見遅々として非効率な活動に感じるかもしれないが、実は本質的な「強さ」を伴う。

本物の「幸福感」とは、この心がけを実践するプロセスにあるのかもしれない。

<大きな成果に必ずつながる3つの小さな重要行動>

1. 周囲への感謝、勇気づける言葉を毎日投げかける
2. 自分の活動を毎日振り返り、出来たことと課題を書き留める
3. 自分のビジョンや目標、やりたいことを周囲に積極的に語る

シンクロニシティ

2014.7

“意味ある偶然の一致”—スイスの心理学者ユングが提唱した「共時性原理」全く関係のない「心、事象、モノ」が、偶然にも共振（シンクロ）し、その人にとって大きな意味をもたらすこと。

「前から読みたいと思っていた本を、突然友人からプレゼントされた」

「乗り遅れた電車に、逢いたいと思っていた友人が偶然乗っていた」

「今までしたことのないミスを、ここ1週間で何故か3回もやってしまった」

「最近出会う人から、同じような悩みを打ち明けられる」

...誰しもこんな経験を少なからずしているのではないだろうか。

単なる偶然、不思議な出来事として流してしまうか、そのシンクロに心に向けて、自分へのメッセージを感じ取ろうとするか。この選択の違いは大きいかもしれない。自分に起きている出来事は、意図したかどうかに関わらず必要であるから起きていると言われる。

あなたに起きた出来事に静かに心に向けて感じてみよう。

あなたに必要な「偶然の共振」は既に起きていて、何か大切なメッセージを送っているかもしれない。

「シンクロニシティ—意味ある偶然の一致」これは経験則的に存在すると確信しています。最初の就職先であるホテルからコンサルティング会社へ転職をする半年前、急に経営者のお客様からの引き合いが多くなり、営業活動の中で経営者とのやり取りに苦労する（相手が話すビジネスの話題についていけない）ケースが増えて悩んでいました。ちょうど同じタイミングで、たまたま同期の叔父さん（この方も経営者）を紹介され、その方から今後のキャリアについて「今のままでは本当に価値ある人生を歩むことはできないぞ!」と強い叱責をいただいたのです。鈍感な私も、さすがに「このままではまずい!」と強く感じ、次のキャリアステージへ向かうことを決意しました。

振返ってみれば、150社を超えるお客様との出会い、開発してきた多くのコンサルティング・研修ラインアップ、構築してきた多種多様なネットワーク...それらは、市場でニーズが高かったから（トレンドだったから）という次元ではなく、その時々私に必要な「メッセージ」を様々な方向からもたらしてくれた「意味ある偶然の一致」であったと感じるのです。

今の自分に必要なことは、既に目の前で起きている―。慌ただしい毎日の中、何気なく流してしまっている時間、やり取りにこそ心に向けてみましょう。大切な「メッセージ」に気づくかもしれません。

『何でもない現象の中にすばらしいチャンスが潜んでいます。
しかし、それは強烈な目的意識を持った人の目しか写らないものです。
目的意識のないうつろな目には、
どんな素晴らしいチャンスもみえることはありません。』
―稲盛和夫（日本の実業家、京セラ・KDDIの創業者）

『人生には、二つの道しかない。
一つは、奇跡などまったく存在しないかのように生きること。
もう一つは、すべてが奇跡であるかのように生きることだ。』
―アルベルト・アインシュタイン（ドイツ・理論物理学者、発明家）

「シンクロニシティ」―

自分に変化や成長を求めるのなら、何かを成しえたいという強い想いがあるのなら、過ぎ去った過去や、まだ見えぬ未来に一喜一憂するのではなく、「今、ここ」に心に向けてみよう。

もう既に「意味ある偶然」が、様々な形であなたのもとに現れているかもしれない。あなたの潜在意識には、あなたに必要なものだけを効果的にキャッチする力があるという。感性を磨き、「今」から大切なメッセージを受け取れたなら、素晴らしい「未来」も獲得できるだろう。

＜“意味ある偶然”に気づくために意識したい3つの言動＞

1. 最近よく耳にする言葉、人物などを思い出し、意味を探ってみる
2. 「奇遇だ」「何かおかしい」と感じたら、その理由を深掘りしてみる
3. 日々の「決まった手順や動作」をあえて変化させてみる

「随处為主、立処皆真...随处に主となれば、立つ処みな真なり」

出典は臨濟録（中国唐代の禅僧で臨濟宗の祖、臨濟義玄の語録）。

—どんなところでも自分が主人公となって本分を尽くせば、その人の居るところ何処でも尽十方界の真実そのものである。

どんな環境や境遇であっても、自分の意志と判断で行動しようとする姿勢を持って生きること。

どんな仕事につくにせよ、その主人公になった気持ちで勉強すれば必ず道が開けて求める成果が得られるという示唆。

私たちは自分が担っている役割、取り組んでいる仕事において真に「主人公」となれているだろうか。自分の周りで起こる問題に対して「主体」となって向き合うことができているだろうか。

毎日の仕事や生活に倦怠感や物足りなさを感じているとしたら、一度問いかけてみよう。

道をひらき、充実感を得るための秘訣がここにある。

あらゆる面において「主体」となって向き合い、選択し、生きていくこと。

私がコンサルティングや教育研修の現場で必ず伝えているメッセージの一つです。

これまで2万人近くのビジネスパーソンと接する中で、同じような立場や環境で類似の問題を抱えている人でも「少しでも前に進もうとしているエネルギッシュな人」と残念ながら「諦めてネガティブな状態に留まっている人」が存在します。このように二分した状況を生み出している要因はどこにあるのか—それは、取り組んでいる仕事や目の前の課題を「自分ごと」として捉えて、行動しているかどうかにあると感じるのです。もちろん細部の事情に違いはありますし、個人の保有能力や経験に多少の差はあるので、この点だけが要因と言い切ることはできません。しかしながら、少しでも前に進もうとしている人は「自分がしたいこと、できること、事実、未来（可能性）」にフォーカスした話題が多く、自分がこれからどうしようとしているかを軸に語っている—つまり自分が主体となって行動しようとするエネルギーが伝わってくるのです。

私もそんな方々との出会いから学ばせていただきました。思うように進まない事態に遭遇した時、「自分は何にフォーカスしているのか」そして「自分ごとにてできているか」

「主体として選択、行動できているのか」という問いを自分に投げかけるようにしています。

『主体的な人であるならば、状況や他人の行動が自分の視野を
広げてくれるような経験を作り出してくれるまで待つ必要はない。
自ら意識的にそういう経験を作り出すことができる』

— スティーブン・R・コヴィー（アメリカ・経営コンサルタント、「7つの習慣」著者）

『人間というものは信じた自分になることが多い。
もし、自分にはそんなことはできないと思ってしまうと、
本当にできなくなってしまう。
しかし、もしできると信じたならば、たとえばはじめはそのような能力が
なかったとしても、それをなし遂げる力を得ることができるのです』

— マハトマ・ガンジー（インド・弁護士、宗教家、政治指導者）

「随処為主」 —

仕事を、解決したいと願う問題を「自分ごと」にしてみよう。

あらゆる状況に対して「主体」となって取り組むと覚悟を決めた時、可能性の扉は開かれる。「主体となった選択と行動」は、あなたにしか成しえない経験と価値、感動を生み出すだろう。自分の人生の主人公は間違いなく自分自身。「選択」を他に委ねてしまうのはもったいない。

一度きりの人生を幸せで充実したものとするために、今、この瞬間から「随処」に「主」となる考え方と行動を心がけていこう。

<“随処為主” となるための3つの問い>

1. あなたにしかできない仕事、こだわりを持っていますか？
2. 問題解決の際、「自分ができること」にフォーカスしていますか？
3. 本当にしたいこと、得たいもの（目的）に向かっていますか？

“変容”とは、姿・形を変えること、変わること。見た目だけでなく、内面の質的变化。

時間の経過と共に徐々に変わっていく(=これが“変化”)というよりは、比較的短期間で(時には一瞬で)自分の考え方や信念が大きく変わり、結果として言動や時間の使い方、そこから得られる成果も劇的に変わることに。

人には必ず劇的な変化、ターニングポイントがあるという。それは環境の劇的な変化からもたらされる場合もあれば、新たな人・仕事との出逢いから、時には一瞬のひらめきから起きることもある。卵から雛が孵るように、蛹から蝶が羽ばたくがごとく。

“変容”は、その劇的な変化に不安や恐怖は伴うけれど、後には大きく成長した自分、ワクワク感のある新たな景色に出逢うことが多い。勇気を持って挑戦してみよう。

あなたの“変容の時”は、今、この瞬間に訪れているかもしれない。

皆さんの変容期(=ターニングポイント)はいつですか？最近、訪れましたか？

私のターニングポイントは記憶(自覚)しているだけで6回あります。学生時代は、小学5年生・中学2年生・大学1年生のタイミングで、社会人になってからはホテルからコンサルティング会社に転職するタイミング、マネージャーとして教育研修事業の立ち上げに関わったタイミング、そして独立起業を決めて動き出したタイミングです。いずれも自分の考え方や価値観が大きく変わり、その後の言動、そして時間の使い方が大きく変わったと記憶しています。当時はそれぞれのタイミングで本当に悩んで苦しみました。今(つまり未来の自分)の視点から見れば、些細なことで悩んでいたものだと思ってしまうのですが、こんな気持ち・目線で振り返ることができる状態が大きく成長した証であるとも感じます。ターニングポイントの時には例外なく心を打たれる“出逢い”、恩師や一生涯の友と呼べる人たちとの“出逢い”がありました。そして社会人になってからは5～6年に一度の周期でそれが訪れており、今はその周期に当たります。臆病者の私は“変容”に際して不安が先行してしまうのですが、勇気を持って進んでいこうと思います！

『人間には、必ず人生の転機を直感し、
的確に判断できるかどうかを試される時が何度かある。
自分自身をどう変革させていくか、悩み抜いて気づいていくしかない』

— アントニオ猪木（日本・元プロレスラー、実業家、政治家）

『幸運といい、不運といい、それは後になって言えることである。
ただ自分がよいと思うところを現実の条件から裏付けし、
あとは勇を鼓して一步踏み出すだけである』

— 大川 博（日本・実業家、東映の事実上の創業者）

「変容を期する」—

人生には大きな「選択」を迫られるタイミングが必ず何度か訪れる。

今の延長線上にあるイメージしやすい未来、不透明でリスクはあるが新たな可能性を感じる未来。

現状の改善をコツコツ進め、徐々に「変化」していくことも大切だけれど、

「変容」を期し、次元の異なるステージへ果敢に挑戦することもまた重要。

現在は社会全体が「変容」しつつある時期。つまり、個人の「変容」も起きやすい環境である。

これまでの慣習、既成概念、過去の成功パターン、業界の常識、既得権益....

これらが一瞬で無意味となる事態はいつ起きてもおかしくない。

あなたの直感を信じて、リスクはあっても新たな可能性を感じる未来を、積極的に選んでいこう。

＜"変容"のために意識したい3つのこと＞

1. やりたいけど無理...と諦めていることこそ可能性を探る
2. 積極的に人と逢い、苦言や助言を素直に受けとめる
3. 過去より未来を、問題より機会を、時流より独創性を重視する

禅の教え「百尺竿頭進一步（百尺竿頭に一步を進める）」より引用。

百尺竿頭とは、百尺の竿の先端=経験と努力で一定の力が身に付いた状態を指す。

進一步とは、歩みを更に進めるという意味。

“努力と修練によって高みに到達したとしても、そこに安住・執着するのではなく、更に一步前に歩みを進めること”、更に高みを目指し続ける向上心の大切さを説く言葉。

懸命な努力を通じて得た大きな成果と成長—それは自信と誇りを与えてくれる。“このままでもそれなりに充実しているし、さしたる問題もない。現状維持でいこう” こんな心のささやきに準じてしまう時、成長は止まり、未来に霧がかかってしまう。

大きな成長と成果を手にしたその時こそ、更に高みを目指す勇気を奮い立たせよう。向上を求めて歩む道程にこそ、深い充実感と幸福を見つけることができるのだから。

今月はたくさんの新人と時間を共にさせていただきました。キラキラした真っすぐな眼差と、課題に戸惑いながらも懸命に取り組む姿勢に、初心（はじまり）の素晴らしさを強く感じました。

「社会人とは...、プロフェッショナルとは...」などと偉そうに伝えている私ですが、自分は彼・彼女たちのように成長や変化を渴望して一所懸命に取り組んでいるか...という問いが心に刺さってきます。

ある商社の新人研修で、先輩社員数名を囲んでパネルディスカッションを実施した時のこと。「大変だった、失敗したという経験が多かった気がするが、それは常に新しいこと、より高い目標にチャレンジし続けてきたからだと思う。今も大きなチャレンジ案件を抱えていて大変だが、仕事は楽しいし、本当にやりがいがある」とエネルギーに語る50代のベテラン社員の言葉が心に染み入りました。

社歴や年齢に関係なく、高みを目指し向上心を持ってチャレンジし続ける姿勢が、キラキラとしたプラスのエネルギーを、感動する仕事と真の充実感を生み出すのだと、改めて確信しました！

『人にとって最も恐ろしいのは、惰性で日を送ることである。

向上心があれば、飽きることがない。

仕事・生活の中に、向上の道を残さねばならない。

向上を求めねばならない』

— 西堀 榮三郎（日本、探検家、第一次南極観測隊副隊長）

『人生に「負け」なんてものは存在しません。

人と競うのではなく、できることから少しずつ努力を重ね、

昨日の自分よりちょっとだけでも成長しようと心がける。

そうすれば、いつの間にか、サクラマスのように

グーンと大きくなっているはずですよ』

— 斎藤 茂太（日本・精神科医、作家）

「進一歩」 —

今日のあなたは、昨日のあなたより成長しているだろうか。

顧客も、あなた自身も「感動」する水準の仕事を目指して、日々研鑽し続けているだろうか。それなりに努力してきた。それなりに経験も積んできた。仕事で一定の成果も出ている。

いつからか、私たちの目指す姿は現状の繰り返しの先に存在するものになってしまっていないか。私たちが見ている、見ようとしている景色は狭いものになってしまっていないか。現状満足の危険性は理解しつつも、実態としてそんな状態になってしまっていないだろうか。ゆったりと現状を味わうことも大切だけれど、それが「惰性」にならないようにしたい。

いつまでもキラキラとし、充実した毎日を送るために。明るい未来を信じられる自分であるために。

より高みを目指して、心のバーを上げ続けていこう。

<“進一歩”のために始めたい3つのアクション>

1. 自分の活動、成長について定期的に振り返る習慣を持つ
2. 自分が担う仕事（職種）において、最高品質の情報を入手する
3. 毎月1つでいいので新しいチャレンジをスタートさせる

“シンギュラリティ（技術的特異点）”とは、アメリカの発明家で未来学者のレイ・カーツワイル（現Googleエンジニア）が提唱した未来のコンセプト。テクノロジーの加速度的発達により、2045年に人工知能（AI）が人間の知能を超え、全く新しい社会システムが創造され、人類が後戻りできないような変容を示唆する未来予想図。

20年前の自分たちの暮らしや仕事の仕方と現在を比較してみれば、“シンギュラリティ”は確実にやってくると想像できる。歴史にも多くの転換点は存在したのだから。

要は、この“特異点=転換点”を前向きに捉え、主体的な選択と行動を起こしていくことが重要なのだ。変化に翻弄され、変化への適応に必死になるのではなく、自分の軸・ありたい未来イメージを鮮明にし、変化を自ら仕掛ける、活かすという考え方が大切ではないだろうか。

時代にも、人の人生にも大きな変化が訪れる“ターニングポイント”ってありますよね。自分の価値観や仕事観、生活スタイルが大きく変わってしまうようなタイミング、出来事が。

皆さんの“ターニングポイント”はいつでしたか？私は振り返るとこれまで3回、大きな転換点があったと思います。1度目は最初の就職先であるホテルでの5年目、2度目はコンサルティング会社時代の2年目、6年目です。いずれも仕事に没頭しつつ手詰まり感(悩み)を感じる中で、自分とは異質の価値観や考え方を持った人と対峙し、ある選択をした...という出来事でした。その当時は大変苦しかったのですが、今振り返れば（結果論ですが）、あの出逢いと真剣に向き合ったからこそ今の自分があると確信しています。大きな変革のタイミング。環境の劇的変化もさることながら、自分の内面で起きている変化（違和感）と向き合い、勇気を出して何かを変える決断こそ、より良い未来を創る“要諦”なのかもしれません。

『これから先はまったく新しいゲームが始まる。
変革を起こそう。
いままで経験がないのだから、
やはり経験したことのないスピードで変化を起こそう。
変化を楽しむ人にとってはとんでもない面白さだ。
変化をつかもうとしない人にとってはとんでもない恐ろしさになる。』
—ジャック・ウェルチ（アメリカ・経営者、元GE最高経営責任者）

「シンギュラリティ」—

あなたは「変革の兆し」を感じているだろうか？

好む、好まざる関係なく、世界はかつてない勢いでその様相を変えようとしている。

変革は「破壊」と「創造」を伴うため、「恐れ」と「期待」が混在する。

「恐れ」に支配され、変革を頑なに拒否する、変革から逃げようとする人がいる。

「期待」を膨らませ、変革に乗り遅れまいと適応準備に必死な人もいる。

ベクトルは違えど、どちらも変革に翻弄されている姿ではあるまいか。

「変革の兆し」を掴むことは大切だ。しかし、変革は目的にもゴールにもなりえない。

より重要なのは、自分のありたい未来を切り開くために、自ら変革を仕掛けることなのだ。

＜“ターニングポイント”を掴むための3つのポイント＞

1. 自分の中で感じる「恐れ」「違和感」を大切にする、深める
2. 自分の周囲でおきている「小さな変化」に目をむける
3. 変革や挑戦をしている人と語り合う時間をつくる

Stay Hungry, Stay Foolish

2016.9

Stay Hungry, Stay Foolish—Appleの創業者スティーブ・ジョブズが、スタンフォード大学の卒業生に向けたスピーチで結びに投げかけたメッセージ。

Stay Hungry

—常に何かを追い求め、高みを目指し、歩みを前にすすめよう。

Stay Foolish

—分かったつもりにならず、恐れず、直感を信じて自由であれ。

彼のメッセージにはこんな意味が込められていたのではないだろうか。

慌ただしい毎日の中で、気づかぬうちに‘過去の常識’に縛られていく。

「人生なんてこんなもの」—達観したかのように自分の可能性を閉ざしてはいないか。世の中は未知で満ちている。落ち着くのはまだ早い。もう一歩前に歩みを進めよう。自分の心に素直になって、信じる道へ。真の幸福感はその過程にこそあるはずだ。

前職のコンサルティング会社に入社して3~4年目ぐらいの時に会ったジョブズのスピーチ。当時は「なるほど！いいこというな、スピーチの構成が素晴らしいな」といった表面的な捉え方しかしていなかったように記憶しています。しかし、時を重ねるごとにメッセージが深く心に刺さるというか、湧き上がるエネルギー、躍動感を強く感じるようになってきました。

自分の「強み」や「軸」が見えてきて、仕事においてもプライベートでもそれなりの充実感を感じることができるようになった現在。それはそれで本当に素晴らしい素敵なことであるけれど、心のどこかで自分へ問いかける声が聴こえます。「Stay Hungry, Stay Foolish！—エゴに縛られて歩みを止めていないか、分かったつもりになっていないか、その先にある可能性を追い求めているか？」

この心の声（=直感）に素直に向き合おうと思います。終わることのないレベルアップに向けた旅へ、独立7年目のタイミングに、これまで以上に挑戦へのアクセルを踏んでいきます！

『君たちの時間は限られている。
だから自分以外の他の誰かの人生を生きて無駄にする暇なんかない。
ドグマ（固定化された教条）という罫に、絡め取られてはいけない。
それは他の人たちの考え方が生んだ結果とともに
生きていくということだからね。
その他大勢の意見の雑音に自分の内なる声、心、直感を
掻き消されないことです。
自分の内なる声、心、直感というのは、
どうしたわけか君が本当になりたいことが何か、
もうとっくの昔に知っているんだ。
だからそれ以外のことは全て、二の次でいい。』

—スティーブ・ジョブズ（アメリカ・経営コンサルタント、Apple創業者）

「Stay Hungry, Stay Foolish」 —

今あなたには純粹に没頭する何か、追い求める何かがあるだろうか？

現在の仕事や生活の中で「仕方がない」とやる前から諦めていることがないだろうか？

当たり前だけれど人生は一度きり。せっかくなら心がワクワクする、感動のある毎日としたい。

「やらなければならない」と信じていることさえ、疑ってみる勇気が必要だ。

相手のために良かれと思ってしていたことが、実はエゴ(独りよがり)となっているかもしれない。

現在の生活を維持する、将来のためと思って我慢していることが的外れという可能性もある。

自分のやりたいことやワクワク感が見えないなら、まずはやったことのない新しいことを始めてみよう。

前に進もうと行動すること、新たな知識や人との出逢い、

それらの‘点の活動’がいつか‘一本の線’でつながることを信じて。

＜スティーブ・ジョブズからあなたへの3つのメッセージ＞

1. 「固定概念（常識）」に縛られるな、自分の「直感」を信じよう
2. 「愛」と「失敗体験」を恐れるな。それは人生を必ず豊かにする
3. あなたにとってより価値の高い、大切な「今」を選択せよ

百聞は‘一験’に如かず

2016.10

「百聞は‘一験’に如かず」—何度も繰り返し聞くよりも、一度でも自ら体感、体験した方が深い感動と学びがある。「一見」ではなく、「一験」こそ重要だ。

簡単に様々な情報にアクセスできてしまう時代、バーチャルな世界の広がり。インターネットにつながった端末さえあれば、大抵のことは知ることができ、無料で大学の授業を視聴することだってできてしまう。世界中の人たちとの交流も簡単だ。

これはこれで素晴らしいけれど、やはりリアルに自分の体で感じ、自分で験してみる機会を大事にしたい。実践と経験から得られる生々しい気づきを大切にしたい。

イギリスの諺にもある通り、「学問なき経験は、経験なき学問に勝る」である。自らの「体感、体験」を通じ、ホンモノの感動、創造、成長を獲得してしていこう。

インターネットで検索した情報のみで「分かった」「学んだ」つもりになっていることはありませんか？ここ数年、私は可能な限り機会を設けて、海外のマーケット、ビジネスの現場に足を運ぶようにしています。フィリピン・ベトナム・中国などアジアの国々が中心ですが、実際に商業施設や工場、学校などを訪れ、現地の人たちと触れ合うと、当たり前ですがパソコンやスマホからは得ることのできないエネルギー、感動、ワクワク感を感じることができます。可能性や夢を熱く語る若き経営者、何とか自分の店で買ってもらおうと必死に売り込んでくる店員、屈託のないキラキラした目をして路地を走り回る子供たち、道路いっぱいに溢れかえるバイクと車の群れ—今の日本ではなかなか感じるもののない、活気のエネルギー、躍動感が全身を駆け巡りました。

仕事でもプライベートでも、疑問や関心が湧くことがあったなら、調べて終わりにするのではなく、もう一步踏み込んで自ら体感、体験してみましよう—そこから得られる学びは、プラス・マイナスに関わらず人生をより素晴らしいものにしていくために、大きな示唆を与えてくれると感じるのです。

『応用が利く、本当に役に立つ知識は、
おっくうがってじっとしては得られない。
必ずそこへ足を運び、自分の手で触り、目で見、匂いを嗅いだり
時に味わったりして、初めて自分のものになる。』
— 西堀 榮三郎（日本、探検家、第一次南極観測隊副隊長）

『“あらゆること”をしよう。色々なことを試そう。
素晴らしいアイデアは、どこからやってくるか分からないのだから。』
— 「仕事は楽しいかね？（デイル・ドーテン著）」より

「百聞は一験に如かず」—

あなたが信じていること、こだわりは何から形成されたものだろうか？

それは、あなた自身が体感、経験したことがベースになっているのではないだろうか。

疑似体験がしやすい時代である。

しかし、疑似は「似ているが疑わしきもの」でしかない。

深い気づきや感動は、ホンモノの体験からしか得られない。

気になる場所があるのなら、実際に足を運んでみよう。会いたい人がいるならば、面と向かってとことん話をしてみよう。興味を惹かれることがあるのなら、自分で験しにやってみよう。

扉は常に開かれている。あとは少しだけ勇気を出して、一步踏み出すだけである。

その扉の先には、ワクワク、キラキラしたあなただけの学びと、人生が待っているだろう。

<体験、体感からの学びを促進させる3つのポイント>

1. 考えていることより、何を感じているかを大切にする
2. 心に響いた体験は、何回か継続して験してみる
3. 体験から得た学びを日々の習慣に組み込めないか考える

な　あた　あら 為さざるなり、能わざるに非ず

2016.11

「為さざるなり、能わざるに非ず」—孟子・梁恵王「上不爲也、非不能也」よりできないのは能力がないからではなく、単にやらないだけであるという意味。

日々の生活の中で、自分には無理だと諦めていること、やらずに後悔していることはないだろうか。これを始めてみたい、本当はこうしたい、と思いを馳せるも現状では難しい...と安易に自分を説き伏せてしまっていないだろうか。

知識や能力、スキルや経験があれば、確かに安心して行動を起こすことができるかもしれない。しかし、新しい何かを始める時、何かを変えようとする時、その要件は常に不十分な状態で、実践を通じてのみ獲得できるものではないだろうか。つまり、能力やスキルの不足を理由に“やらない”としている姿は、変化への恐怖や不安に囚われているか、本当はそれをしたくないかのいずれかなのだろう。一度きりの人生、本当にしたいことはまずやってみる、その勇気と決断を大切にしていこう。

これまで自分が歩んできたキャリア（ホテル就職5年～コンサルティング会社転職10年～独立起業）を振り返ると、「勇気を出して、まずやってみること」の大切さをヒシヒシと感じます。臆病で保守的である私は、自己変革に際し、“あーでもない、こーでもない”と自問自答を何度も繰り返し、周囲からたくさんの勇気づけと後押しをいただいてやっと意思決定してきました。しかし、その意思決定の先に待っていたのは、いずれの選択もそれまで以上にやりがいと幸せ感を感じることが多くなるという結末でした。もちろん、新たな道に進んだ（変革の）直後は厳しい状況に追い込まれることも少なくありませんでしたが、精一杯懸命に取り組むことで、周囲のサポートを素直に受け入れることで、何とか前に進んでこれました。そう、何とかなるものなのです。

そんな気づきを得てきたはずの私ですが、未だに変革への決断には‘ウジウジ問答’の繰り返しを伴う状態です。だからこそ、臆病者の自分へ勇気づけのエールを常を送るようにしています。

「為さざるなり、能わざるに非ず」—できないのではない、やっていないだけではないか？と。

『父（佐治敬三）は、「理屈を言わずに、まずはやってみなはれ」とよく言っていました。やらざるの罪といいますか、やったほうがいいと思っているのにやらないのはよくない。失敗しても真剣に取り組んだのなら、それでよろしいということです。それに、少々の失敗には目をつぶってやらせないと、この精神はなかなか定着しないと思うんです。』

— 佐治信忠（日本の経営者「サントリー」4代目社長）

『あなたにできること、あるいはできると夢見ていることがあれば、今すぐ始めなさい。向こう見ずは天才であり、力であり、魔法です。』

— ヨハン・ゲーテ（ドイツ・詩人、小説家）

「為さざるなり、能わざるに非ず」—

もしも神さまが「成功」を約束してくれるとしたら、あなたは何をするだろうか？
あなたが「したい」と思っているのに「していない」ことがあるとしたら、その理由は何だろうか？

過去や未来は実存しない。「今、この瞬間」を懸命に生きることこそが重要だ。

偉大な先達たちから学べるとても大切なメッセージ—それは「まずやってみる」こと。

「やらない」は何も生み出さないが、「やってみる」は僅かでも何かを生み出すのだ。
成功する確証など、いつまで考えても得られるものではない。

能力やスキル、人脈やチャンス、いずれも「行動」なくして手に入れることは困難だ。
さあ、今この瞬間から、あなたが本当にしたいと想うことをスタートさせよう。

＜“まずやってみる”精神を育む3つのポイント＞

1. 自分が本当にしたいことを明確にする（書き出してみる）
2. 「はじめの一步」は小さくして、早く行動することを重視する
3. 行動力のある人と会う機会をたくさんつくる

Begin Now !

2017.6

「Begin Now !」—今から始めよう！ 以下の英語の格言より。

“We cannot start over, but we can begin now, and make a new beginning”
(私たちはやり直すことはできないが、今すぐ始め、新たな始まりを創ることはできる)

“Dream Big, Start Small, Begin Now”
(夢は大きく、最初の一步は小さく、今から始めよう)

過剰に未来を不安視し、やる前から諦めてしまっていないだろうか。
過去の失敗や経験に縛られて、何かを始めることに躊躇していないだろうか。

過去を悔いても起きたことは変えられない。未来を憂いても望む未来はやってこない。自分が変えることのできる“今”にフォーカスし、思い切って一歩踏み出してしまおう。

その先にある未来は、あなたに新たな発見、気づき、希望を与えてくれるだろう。

やりたいと思っているのに実行に移せていないこと、ありませんか？

私の友人や顧客には、やりたいことを軽やかにスタートしている人が本当に大勢います。独立起業した人、会社・役所勤め、主夫（婦）、NPO法人所属、フリーランス...など立場は様々ですが、皆、大変なことも多いはずなのに生き生きとして、充実感がヒシヒシと伝わってきます。こんな人たちと時間を共にできて、刺激や勇気をもらえるのは本当に有り難いことです。感謝です。

この軽やかにやりたいことをスタートできる人たちから学ぶべく、共通項はないかと探してみると、

「不安やリスクより、価値や意義・リターンを重視する」「スタートアクションは小さく、試す感覚で」「不得意なことは周囲の力を頼る、借りる」「相談された事には出来る限り応えようとする」「面白いこと、楽しいこと、語ることが好き」「何とかかなると思いつんでいる」...といった特徴があると感じます。

この学びを活かし、私も牛歩なみですが、コツコツとやりたいことをスタートさせていきます！

『チャンス逃すな。まず決断せよ。
石橋を叩くのはそれからいい。とにかくやってみなはれ。
やる前から諦める人間は、一番つまらん人間だ』
— 西堀 榮三郎（日本、探検家、第一次南極観測隊副隊長）

『上手くやろうとすればするほど、準備に時間がかかり、機会損失は
拡大する。下手でもいいからやってみて、上手くいかないところは、
その都度、直していく方がずっと効率的です』
— 奥田碩（日本・実業家、トヨタ自動車相談役）

「Begin Now！」—

思い切って踏み出してみた先には、ワクワクする景色が広がっている。
チャレンジすることそのものが、自分への信頼と自信につながっていく。
自分への言い訳を振り払い、少しだけ勇気を出して、今ここからやりたいことをスタートさせよう。
過去の失敗や後悔に囚われることはない。過去と今のあなたは違うのだから。
将来のリスクや不安ばかりにフォーカスし、未来を悲観して歩みを止めるのはよそう。
未来は「今」の連続体。やってくるのではなく、向かっていく先にあるものだから。
きっと大丈夫。軽やかに、しなやかに、まずは小さな一歩を踏み出そう。
充実した素晴らしい未来、人生は、あなたにしか描くことができないのだから。

＜軽やかにやりたいことをスタートさせる3つのヒント＞

1. 「やりたいこと」を実現した状態、ワクワク感をイメージする
2. スタートアクションは小さな一歩で
3. 何でも一人でやろうと思わず、周囲の力を借りる

「探究する心」—様々な物事について興味を持ち、見極め、解明しようとする気持ち。ひとつの物事に深く没頭して、本質を突きつめようとする心のあり方。

“情報洪水”の現代、毎日触れる膨大な情報に圧倒され、思考も感情も停止状態になってはいないだろうか。ネットに流れる表面的な一次情報に翻弄され、あなた自身の考えや真の心の声がかき消されてはいまいか。

こんな時代だからこそ、「探究する心」を大切に育みたい。

自分の心の声に耳を傾け、疑問や興味・関心を持ったことと素直に向き合ってみる。

直感的に感じた違和感や可能性を否定せずに受け入れ、その本質について深めてみる。分かったと思っていることほど、本当にそうかをもう一度自問してみる。

真の学び、質の高い体験、ワクワク感—その根底には「探求する心」があるのだ。

皆さんは探究している何かがありますか？今一番興味を持っていることは何でしょう？今年も延べ2,500名を超える方々とビジネスの現場でお会いする機会に恵まれましたが、年々、仕事においてもプライベートにおいても冒頭していること、夢中になっていることを持っている人の割合が少なくなっていると感じます。また、これは昔からある傾向なのかもしれませんが、“結果ややり方”は知りたがるのに“本質や根本の仕組み”を深く理解しようとしなない人が多い、という傾向も強まっているように感じます。「結局、何をすればいいですか？」「要は〇〇という結論でいいんですよね」「私はよく分からないので任せます」というような反応で終わるという状況によく出くわすのです。

物事を自分の頭と心で捉え、実際に体感してみてこそ“真の理解、学び”を得ることができのではないのでしょうか。“情報爆発×AIの発達”が加速する時代だからこそ、自分の「探究する心」を大切に考動し、本当に夢中になれる、感動できる何かを見つけることが大事なのだと感じるのです。

改めて自分に問いかけてみてください。「今、一番つきつめてみたいことは何ですか？」

『人にとって最も恐ろしいのは、惰性で日を送ることである。

向上心があれば、飽きることがない。

仕事・生活の中に、向上の道を残さねばならない。

向上を求めねばならない。』

— 西堀 榮三郎（日本、探検家、第一次南極観測隊副隊長）

『過去から学び、今日のために生き、未来に対して希望をもつ。

大切なことは、何も疑問を持たない状態に陥らないことである。

神聖な好奇心を失ってはならない。』

— アルベルト・アインシュタイン（ドイツ・理論物理学者、発明家）

「探究する心」—

あなたが毎日目覚めるとき、清々しく、前向きなエネルギーを感じるだろうか？

もしそうでないのなら、あなたの「探求する心」が弱ってしまっているかもしれない。

私たちは皆、生まれたときは好奇心の塊だった。何かを見つければ、触れて試して、感じてみた。

数多の失敗を繰り返して学び、より安全に楽しく生きる術を身につけた。驚愕の成長スピードで。

大人になった今の自分はどうかだろう。何かに興味・関心を持ち、ワクワクしながら生きているだろうか。

「なんで？ どうして？」という心の声に素直に耳を傾け、それらを深める考動を起こしているだろうか。

キラキラとした毎日、充実感ある人生、その第一歩は「探究する心」を育むことなのかもしれない。

＜“探究する心”を育むための3つの心がけ＞

1. 「なんで？ どうして？」をスルーせずに必ず深める、訊いてみる
2. 一次情報を鵜呑みにせず、掘り下げて「大元」を掴むようにする
3. ワクワク、楽しいと感じた時の本質を探ってみる

「意気軒昂」—氣力があふれていて、奮い立つ様子。前向きなエネルギーがみなぎり、ありたい姿の実現に向け行動しようという思いにあふれている状態。

「意気」は氣力や氣概、前向きに動こうとするエネルギー。

「軒」と「昂」はどちらも高く上がる、感情の高ぶりを表す言葉。

ありたい姿(ビジョン)が明確で、その実現に向けて本気で活動している人。自分の大切にしている価値観、信念に正直で、常に高みを目指している人。周囲の人たちと明るく自然体で接し、問題にも気負わず軽やかに対処できる人。

元気な挨拶、笑いに満ちた会話、ポジティブ・フィードバックができる人。

こんな人には“応援者”が集まってくる、“チャンス”がやってくる。

やりたいことを実現するにも、やるべきことを片付けるにも、「意気軒昂」でいこう。下を向いて難しく考えるより、顔を上げて軽やかに小さな一歩を踏み出してしまおう。

皆さんは今、どんな気持ちで仕事に取り組んでいますか？

前向きなエネルギー、高揚感を感じる瞬間がありますでしょうか？

ここ1～2年、複数の会社で「新規事業開発」や「イノベーション促進」というテーマでご支援させていただく機会をいただきました。20後半～30代の若手中堅社員対象の企画で、最終提案会では30を超える新事業・アイデア提案を聴かせていただいたのですが、その中で「おっ！これは凄い！」と感じる記憶に残る提案が5つほどありました。外部環境変化を捉える着眼点に納得性が非常に高かったり、現存するサービスの組み合わせ方が絶妙だったり、本当に斬新なビジネスモデルやサービスだったり、そのアウトプットの素晴らしい点は様々なのですが、記憶に残る提案をしてくれたチームはその活動プロセスにおいてある共通点があることに気づきました。それは「とにかく明るく行動的な雰囲気がある」「本音で語り合っている」「笑いがあって楽しそう」「間違いを発見したら戻って検討している」「全員が検討テーマに前のめり(冷めてない)」といったことでした。

チームで素晴らしいアイデアや成果を生み出せるかどうかは、メンバーの知見や経験の有無以上に、こうした取り組み姿勢や雰囲気の醸成が重要なかもしれません。

『眉間にしわを寄せていたところで、悪い状況が良くなるわけではない。
むしろ、“これを乗り越えれば、また一つ上のステージにいける！”と、
明るく危機感を受けとめる姿勢が必要です。思い通りにならない時でも、
そこでしか学べないことがあると思います』
— 松岡修造（日本・元プロテニスプレーヤー）

『終着点は重要じゃない。
旅の途中でどれだけ楽しいことをやり遂げているかが大事なんだ』
— スティーブ・ジョブズ（アメリカ・経営コンサルタント、Apple創業者）

「意気軒昂」 —

“泣いて暮らすも一生、笑って暮らすも一生。ならば今生、笑おうぞ。”

毎日の暮らしにワクワクがあるだろうか。仕事に熱を感じているだろうか。

一度きりのかけがえのないあなたの人生。決して戻ることのない今、この瞬間。

せっかくなら希望と可能性に焦点をあて、笑って、楽しんで物事に取り組みたい。

あなたの高まる想いと情熱、楽しむエネルギーは、周囲の人たちに必ず伝播する。

そしてそれは大きなうねりとなり、チャンスを引き寄せ、想像を超える成果をもたらすだろう。

＜“意気軒昂”な状態になるために心がけたい3つのアクション＞

1. 意気軒昂な人、グループと関わる機会を増やす
2. MustよりWantを、問題より機会にフォーカスする
3. 良質な睡眠を毎日7時間程度取る

セルフ・エフィカシー

2018.6

「セルフ・エフィカシー」—カナダの心理学者アルバート・バンデューラが提唱した概念で、日本語では自己効力感。自分がある状況において必要な行動をうまく遂行できるという可能性の認知、遂行できることへの自信。予期せぬ事態（問題）への対処を求められる時、新しい何かに挑戦しようとする時、私たちは「本当に自分にできるだろうか...」「失敗してしまうのではないかと...」という疑念と恐怖に心が支配され、最初の一步をなかなか踏みだせないことが多い。

はじめてさえしまえば何とかなることも多く、仮に上手くいかないとしてもその実体験が次の成功確率を確実に高めるはずなのに。自己効力感を高めよう。あなたはあなたが思う以上に素晴らしい強みとエネルギーを持っているのだから。

皆さんは今、毎日を楽しみ、能動的に過ごしている実感はあるでしょうか？

今月も仕事でたくさんのビジネスパーソンとの出逢いがありました。毎年6～7月は主に昇進昇格に伴う教育を担当させていただき、新任のマネージャーやリーダー（年齢は30～40代）と時間を共にする機会が多かったのですが、年々ある心配な状態が加速しているように感じます。それは、自分の新たな役割や未来について、「期待・ワクワク感」よりも「不安・プレッシャー」の方が圧倒的に大きく、「自分には難しいのではないかと」感じている人が増加していることです。

だからでしょうか。研修で未来のありたい姿やビジョンを検討している時でさえ、「熱」を感じないというか、楽しそうでないのです。そもそもありたい姿がイメージできなかつたり、いつの間にか難しい顔で「○○しなければならない」というフレーズで話している、といった状況が散見されるのです。

周囲へ高い影響力を持つ人たちの多くがこの心理状態では、現場の活性化させ、素晴らしい仕事や成果を生み出すのは至難の業です。何としてもこの状況を変えたい、そう思うのです！

『何もしないことは疑いと恐れを生み出す。
行動は自信と勇気を生み出す。
もしあなたが恐怖を克服したいのであれば、
家の中で座って悩んでいてはいけない。
外に出て、行動を起こすのだ。』

— デール・カーネギー（アメリカ・作家、自己啓発トレーナー）

『不安をたくさん抱えてるって？じつは、みんな同じなんだ。
だから、周りを過大評価し、自分を過小評価しないように。
君は、自分が思っている以上の力を秘めているんだ。』

— T.ハーブ・エッカー（カナダ／作家、マネーコーチ）

「セルフ・エフィカシー」 —

「今、自分は充実している、毎日を楽しめている！」と感じているだろうか。
そんなのは幻想だ、現実はそんなに甘くない、未来は厳しさに満ちている、そう感じる
だろうか。
あなたの素晴らしい素質を、強みを、可能性を、自ら閉ざすのはもう止めにしよう。
理想の未来像、やってみたいこと、出逢いたい人やコト、その想いを大切にしよう。
ワクワクする未来の実現には、自分への前向きなエネルギー（効力感）が欠かせない。
小さな一歩からでいい。自分を信じ、あなたが楽しめること、ワクワクすることをス
タートさせよう。

＜“セルフ・エフィカシー”を高めるための3つのポイント＞

1. 自分が楽しい、ワクワクすることを優先させる
2. あなたにプラスの言葉をかけてくれる人との時間を多く持つ
3. 体調を整える習慣を身につけ、すぐに行動できる状態を保つ

「不羈奔放」—常識や規範など、何かに囚われることなく、自分の心のままに振る舞うこと。また、その状態を表した言葉。

不羈とは、束縛されない、押さえつけられないという意味。又は、優れた才能が発揮されて(非凡)、通常では律せられない状態のこと。

奔放も同様に、何かに束縛されていない、解き放たれた様子、状態を意味する。

過去の経験、立場や役割、組織の目標、周囲からの期待、目先の困りごと....。

私たちは色々なものに“囚われて”毎日を過ごしてはいないだろうか。

本当の気持ち、大切にしたいこと、心から楽しいと感じることは棚上げにして。激変する環境だからこそ、経験則や常識、目先の問題に縛られるのはやめにしよう。もっと自由に、ゼロベースで発想して動いていくのだ。真に幸福な人生のためにも。

皆さんは日々の判断や選択をどんな基準で行うことが多いでしょうか？何が軸になっていますか？

「過去の経験から考えれば」「常識的には」「組織人として」「マネージャーとして」「親として」など。

人は何らかの基準や役割を軸として状況を捉えたり、意思決定することが多いと考えます。

私も自分のこれまでを振り返ると、「長男として、兄として」「組織のリーダーとして」「コンサルタント（育成に携わる者）として」「親として」といった役割をベースに考え、判断や選択をすることが多かったように感じます。これはこれで今の自分を創ってきたプロセスなので肯定的に捉えることができる反面、役割認識という枠に囚われた考え方や意思決定であったとも言えます。自分の内なる声よりも外的要素を優先してきたのかもしれませんが。様々な領域で基準や考え方がどんどん変わっていく変革期に、これまでの基準に従ってはいずれズレが生じるのは必然です。

もっと自由に、自分の内なる声に正直に、ワクワクするアイデアや本当に大切にしたいことを最優先にして参りましょう！

『柔軟であれ。人は生きている時は柔軟である。死ねば人は固くなる。人の肉体であれ、心であれ、魂であれ、柔軟が生であり、硬直は死である。』

— ブルース・リー（香港・武道家・映画俳優）

『人生は短い。ルールに縛られることはない。すぐに許してあげなさい。
ゆっくりキスをして、本当に愛してあげなさい。』

— マーク・トウェイン（アメリカ、作家、小説家）

『運命に人は縛られるのではない。
ただ自分の心に縛られているだけなのだ。』

— フランクリン・ルーズベルト（アメリカ／政治家、第26代大統領）

「不羈奔放」 —

あなたは、自分の本当の想いやパワー、自分らしさを解き放っているだろうか。
自然に、自由に、心の感じるままに。爽やかで温かなエネルギーが湧いてくる感覚があるだろうか。何かにチャレンジしようとする、と、「できない理由」が先立って前に進めない状態にないだろうか。不確実性が極めて高い現代に、これまでの基準に縛られて何も行動を起こさないのは本末転倒だ。先々に確証が持てないからこそ、自分の心と力を信じ、自由に発想して「まずやってみる」のだ。解き放たれたあなたの素晴らしいエネルギーは、より良き未来への道を必ずひらくだろう。

＜“不羈奔放”な状態になるための3つの心がけ＞

1. すぐに「無理だ」「難しい」と思ったことほど可能性を探る
2. ワクワク感、充実感の大きなことを最優先にする
3. 異なる考え方や価値観こそ傾聴する

証は行動の中にあり

2019.3

「証は行動の中にあり」―“行ずれば証はそのうちにあり。行ぜずして証は得ることなし”という禅の教えから。「行動、実践」だけが生きていることを実感させてくれ、事実としての結果(成果)をもたらす、という示唆。

当たり前だが、あれこれ考えているだけでは何も変わらないし、成果も得られない。むしろ考えすぎるほど、足が竦み、行動にブレーキがかかるのではないだろうか。

リーダーシップの本質とは真に、「行動」を源とした影響力の発揮にある。変化の激しい今だからこそ、「思考」より「行動」を優先していこう。あなたが求める成果を得るために、周囲にプラスの影響力を発揮していくために。

どんなに素晴らしい考え方、ビジョン、計画を持っていたとしても「行動」を伴わなければその実現はありません。当たり前のことなのですが、「思考」から「行動」への移行は想像以上に難しいものですよね。

今月のトピック「キューバ視察旅行」でのエピソードを一つ紹介します。5日間の視察スケジュールの後半に、カリブ海の浜辺でゆったりと心身をリフレッシュする時間を持ったのですが、ある一人の女性の行動が私たち3人に深い気づきを与えました。その女性は白いワンピースを身にまとった綺麗な方（おそらく旅行客）だったのですが、その容姿以上に目を奪われたのは、浜辺を歩きながらゴミを拾っている行為でした。どんな考え方や気持ちからその行為に至ったのかは、想像するしかありませんが、「事実」としてのその行動を目の当たりにした時、素直に素敵だなと感じたのです。

連日、組織開発やリーダーシップ、イノベーションについて議論してきたことも影響しているかもしれませんが、リーダーシップの本質をその女性の行動に観た気がしました。そして、ただ浜辺に寝転んでボーっとして（そういう時間も大切だと思いますが...）、ゴミを見ても無関心で、何の行動も起こさなかった自分の感性に「マズい！」と強く思いました。その後、私たち3人もゴミを見つけたら拾うという行動を真似しつつ、リーダーシップとは“行動の在り様”だと改めて感じたのでした。

『自分のできることをとことんやってきた、という意識があるかないか。

それを実践してきた自分がいること。

継続できたこと。そこに誇りを持つべきだ』

— イチロー（日本・元野球選手、メジャーリーガー）

『有益な結果をもたらす行動の前には、思想と理論が必ず存在する。

しかし行動はそれ自身、思想や理論よりも崇高なものである』

— ウィリアム・ワーズワース（イギリス・詩人）

「証は行動の中にあり」—

自分はどんな人間か、その答えはこれまでの選択と行動の軌跡の中にあるだろう。

あなたの素晴らしい考えやアイデアは、言葉と行動の両方で示された時、強い共感を生むだろう。

あれこれ考えすぎて不安や疑心で心が曇ってしまう前に、思い切って一步踏み出してしまおう。

失敗したら、また戻ってやり直せばいいだけのこと。そんな「軽やかさ、しなやかさ」が大切なのだ。

自分のありたい未来を、周囲とのより良い関係性を、あなたの「行動」によって現実化していこう。

＜”行動を起こし、継続する”ための3つのポイント＞

1. 本当に重要なこと、大切なのに後回しにしていることに気づく
2. ベイビーステップで始める（最初の一步は簡単でシンプルに）
3. 自分や周囲の「プラスの変化」にフォーカスする